

JELA NEWS

ジェラニュース 第50号 2019年12月15日発行 発行責任者 渡辺 薫

一般社団法人日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp

難民支援/世界の子ども支援/ボランティア派遣/リラ・プレカリア(祈りのたて琴)/奨学金制度/宣教師支援

私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます

お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。 マタイによる福音書25章35～36、40節



米国グループ・ワークキャンプに 14 人が参加!

この号にはこんな記事が…

- 【P2-4】米国グループ・ワークキャンプ参加者の感想文一覧
- 【P5】奨学金：「私は世界で一番幸運な人間」ロードソン・タグボジャ
- 【P6-7】ブラジル支援：元気もりもり森 一樹のブラジル派遣記 その2 / 世界の子ども支援チャリティコンサート 2019 報告
- 【P8】ブラジル福音ルーテル教会ジアデマ集会所改築支援者一覧 / 編集後記



米国グループワークキャンプ2019 参加者報告

JELA は毎年夏に、アメリカ・グループ・ワークキャンプを実施しています。今回は7月24日～8月6日の日程で、14名の青少年が全国から参加しました。14名とスタッフらはホームステイをミシガン州で数日間行い、イリノイ州プリンストンでの一週間のキャンプに参加しました。

<グループワークキャンプの沿革>

1977年、米国コロラド州を襲った大洪水の被災者を支援するために、米国のキリスト教青年書専門出版社「グループ」がボランティアを募り、全米から集まった300人により始まったキャンプ。貧困地区の家屋修繕と賛美集会を組み合わせたこの催しは、現在は全米・カナダ及びその周辺国の50以上の地域で開催され、さまざまなキリスト教会・教派の青年が毎年、合計数万人参加しています。キリスト教でなくても参加可能。JELAは2001年から、150人を超える青年たちを日本から派遣してきました。

以下に参加者全員のレポートをご紹介します(JELAが一部編集)。

船山 李緒(JELC 蒲田教会)



夜のプログラムでは、神様について考えたり、歌ったり、踊ったりしました。その中でも特に印象に残っているのは、四日目の夜プロです。紙に自分の罪を書いてそれを水の中に入れ、【神様がその罪を赦してくれるように、紙が溶けていく様子を見】ました。そのあと、30分間お祈りをしました。自分一人になって神様と

向き合う時間でした。好きな場所でお祈りしていいと言われて、ステージにある十字架の前にしゃがんでお祈りを始めた男の子がいました。その子を見て神様を信じる決心ができました。今まで神様を信じている、と思っていましたが、その時本当に心の底から神様を信じようと思いました。30分近くもお祈りしたのは初めてでしたが、お祈りし終わったときはとてもすっきりした気分になりました。ワークキャンプに行ったことで、私は変わることができたと思います。

吉尾 奏穂(東京都)



以前から海外に興味を持っていた私は、友達に誘われて初めてこのワークキャンプに参加しました。最初は不安や恐怖はそれほどありませんでしたが、ワークキャンプが始まり、それぞれのクルーに日本人参加者が一人一人散らばっていくことを知った時からだんだん不安が胸いっぱいになり、英語で上手く話せるかなと思ったり、上手くその輪の中に入って馴染めるかなど、色々な不安がありました。しかし、クルーメンバーと実際に集まった時に、気にかけてくれたり、優しくしてくれて、とても安心感を持ちました。そのおかげで作業している時や休憩時間の時も、知っている単語で上手く文章を繋げたり紙に書いたり表

現したりなど、その輪の中になんとか入り、溶け込むことができました。そして、何人かの人とメアドを交換したり、仲良くなることができて良かったです。

船山 真希(JELC 蒲田教会)

私は四日目の夜のプログラムが忘れられません。30分間のお祈りの間、ワークキャンプでの日々を思い返していました。声をかけてくれる子がいること、昼のデボーションでははじめは答えられなくても、次の日には答えられるようになったこと、最高のクルーのメンバーに囲ま



れていること。少し神様に思いを巡らせれば、神様のたくさんの愛があることに感動しました。また、十字架の前でひざまずいてお祈りしたら、心がなぜかとてもすっきりしました。それは、神様が自分の罪を拭き去って下さったからだだと思います。今回、夜プロで神様の愛を感じることができたから、これからも、自分でお祈りする時間を作っていきたいと思いました。

亀谷 愛(JELC 名古屋めぐみ)

ワークキャンプに参加して、自分自身が変わった点は自分で実感できるものだけでもいくつかありますが、その中でも特に大きかったのが「イエス・キリストを信じるということへの自信」の変化です。お昼のデボーションで、「みんなの地元でゴッド・サイティング(※神様の存在を感じた出来事のこと)を気軽にシェアできそうなのは誰ですか?」という問いかけがありました。その時に、クルーの同世代のアメリカの子達は次々に挙げていました。学校の友達、習い事の友達……。私はその時に、アメリカと日本のキリスト教の割合の圧倒的違いに改めて気づかされました。そのデボーションの時間を使って、クルーに日本の宗教のことやアメリカとのクリス



チャンの割合の違いを説明すると、みんな驚いた表情をしていました。クルーの男の子が「周りにキリスト教も少なく、宗教の都合もあまり通らないのに、それでもイエス・キリストを信じているのは、あなたが神様からハンパなく追い求められてるからなんだよ」って、今年のテーマ「relentless」(ハンパない)を使って、私に話してくれました。今までイエス・キリストを信じている事に自信がなかったわけではないけれど、沢山の人の中から私を選んで教会に繋げてくれていること、ワークキャンプに参加するように導いてくれていること、アメリカのキリスト教の子の考えを私に与えてくれていること、私の事をきちんと見てくれて正しい道に向くようにしてくれていることにとても安心しました。

田中 春音(JELC 蒲田教会)

クルーのメンバーとペンキ塗りドリルで家の修理をしました。ペンキ塗りは2回目でしたがとても大変でした。ドリルは初めてやったので、すごく難しく感じました。日本ではボランティアのようなことはやったことがないので良い経験になりました。そして、ボランティアはとても大変なことなんだ、神様に仕えていんだと、この経験を通して感じる事が出来ました。また、レジデントは足が不自由で簡単には歩けない方だったので、とても喜んで下さいました。



太田 士勇也(JELC 大岡山教会)



クルーのメンバーと一緒に作業をしたこと、毎晩外に出てクルーのメンバーや他の友達とバレーをしたり、追いかけて遊んだりしてたくさん遊び、プログラムの時には一緒に考え、一緒に賛美し、たくさんのアメリカの人たちと交流を持ち、大きな経験をできたこと全てが僕の思い出となって、これからの人生の生きる糧になるんだろうなと思いました。

吉村 章(JELC 健軍教会)



アメリカ人のパーソナルスペースは広いと聞いていました。しかし、実際に会ってみてみればそんなことはなく、みんな優しい人でしたし、フレンドリーで、明るい性格を持っていました。日本人と比べて違う部分は、人を見た目で判断しないということです。日本のある人は、自分のような健常者とは違う障がい者たちを敵として見ていることがとても残念です。アメリカはもともといろんな人種が住んでいて、それが当たり前で、周りの人は自分と違うのが常識だからこそ、今のアメリカ人のルーツになったと思います。障がい者である私でも友達になろうと話しかけてくれました。それがとても嬉しかったです。

人は本当に自分で経験をしなければ感じる事ができないと思います。ワークキャンプで経験をしたことを人に話すのは本当に難しいと思いました。人は感じ方がそれぞれだから、話すのではな

く、自分自身が行って経験をした方がいいと思いました。

武田 好々良(辻堂キリスト教会)



修理をしなければいけない現場へ向かい、作業前にはみんなで手を繋いで神様にお祈りしました。この時間があるから、私は気持ちを落ち着かせて作業できたのだと思います。また、自分からなにをすればいいのか聞くときには、合っているかわからない英語で必死に伝え、伝わったときは凄く達成感がありましたが、もっと英語が喋れたらなあ…と度々後悔しました。クルーの皆とお別れをする最後の日に、プレゼントを渡した時、「Thank you!」と言ってくれたことを、この先一生忘れないと思います。

武田 咲々良(辻堂キリスト教会)



この一週間、私はたくさんのことを学び、関り、経験し、考えました。後悔したことも、泣きたくなったこともあったけれど、それ以上に、思い出は私にとって最高の瞬間でいっぱいでした。日本にいたままの私では絶対にしなかったこと、できなかったこと、感じる事ができなかったことを、この短い間でたくさんしました。そしてこの一週間、普段よりも、神様という存在を強く感じ、普段よりも、神様に心を向けて祈ることができました。

この一週間、思い返せば、新しい自分であふれています。この瞬間でしか、できなかったこと、出会えなかった人。私はたくさんのことを新しく考え、決意しまし

た。この短い間で、こんなに最高の出来事っていっぱいなのはこれが初めてだと思います。人生で一番、最高の思い出が詰まった一週間です。

平林 和加子(JELC 大岡山教会)



お昼ごはんを済ませた後、私が最も恐れていた、デボーションの時間になりました。18人もいたので、挙手制で答えることになり、ほっとしましたが、最後に「どうしたらこの一週間を最高の日々にすることができるでしょう。」という問いがありました。私はこれを聞かれ、このまま何も答えずに終わることもできたが、それではアメリカにきた意味がないと思いました。自分から話しかけなければ一週間を無駄にしてしまうと思い、勇気を出して下手くそな英語で答えたのにもかかわらず、みんな耳を傾けてくれて、話しかけてくれるようになりました。

和田 賛太(JELC 箱崎教会)



ワークキャンプのプログラムの中で、1人になり、自分が犯してきた罪と向き合い、その罪について神様に祈るというプログラムがありました。そのプログラムに参加しているときに、泣いている人などが多くいて、その場にいた皆が真剣に取り組んでいて、自分の罪と向き合っているということがよく分かりました。実際に生活していると、そのように自分の罪について深く考える時間がないので、

自分と本気で向き合う時間が取れてとてもよかったと思います。その中で私は、自分の罪と向き合い、神様にその罪について祈る行為が生きていく上でとても大切な行為なんだな、と思いました。これからそのように、自分と向き合うという時間をとっていきたいと思います。

川路 咲喜(JELC 東京教会)



クルーのリーダーの Jim が声をかけてくれた時、彼を信じて自分の辛い気持ちを打ち明けようと思い、言ってみました。すると Jim は、最後まで聞いてくれて、「自分をサキの本当のお父さんだと思って。家族だと思って。」と言ってくれました。辛い思いを言えただけでも楽になったのに、こんな言葉をかけてもらえて、言葉に出来ないくらい安心して涙が出ました。

穂積 愛理(東京都)



私のグループはポーチ(縁側、ベランダ)を作りました。木を切ったり、釘を打ったりとやることすべてが初めてで戸惑いや、器具に対する恐れがとてもありました。しかし、クルーのメンバーがお手本を見せてくれたり、コツやポイントを教えてくれたり、励ましの言葉をかけてくれました。そのため勇気を出してトライすることができ、作業を終えるたび

に褒めてくれて自信を持つことができました。また、お互いで声を掛け合うことにより始め少し距離があったものの、だんだん距離が縮まりとても仲良くなることができました。クルーだけでなく、日本人メンバーとの間でもお互いわからないことを助け合い、その日大変だったことや、不安なことなどを相談し、安心感のある憩いの場を作ることができました。仲間と支え合うことは、達成感を分かちあえるだけでなく、信頼関係やたくさんの人との出会いを生み出してくれる素敵なおものであることに気づきました。

船城 倫太郎(JELC 小鹿教会)



僕はこのキャンプに参加する前、どう周りにとけこめばいいのか、自分の英語は通じるのか、相手の英語を聞き取ることが出来るのかなど、心配なことばかりでした。また、現地の人に対しても英語がわからない僕達を面倒くさかったりしないかとか、相手にしてくれないのではないかなど、不安を抱いていました。

しかし、実際にワークキャンプが始まるとそんなことは全然なく、日本では感じる事の出来ないような人の温かさを感じることが出来ました。自分たちとは住む文化が違うけれど、日本にもこのキャンプで貰った人の温もりを持ち帰り、それを今度は自分が人に与えられるようになればなと思いました。

【お知らせ】

2021年にむけて、JELAは新しいアメリカ・キャンプを企画中です。そのため、2020年度は準備期間とし、アメリカ・ワークキャンプを実施しません。2021年のキャンプの募集は、準備が出来次第、本紙やJELAホームページにて告知いたします。どうぞお楽しみに!

奨学金支援事業

JELAは毎年、社会福祉や国際社会への貢献を志す人々に給付型の奨学金を差し上げています。今年の支援ではガーナ福音長老教会のロードソン・タグボジャ牧師がアジア学院(栃木県にある発展途上国の農村リーダー育成を担う教育機関)で学ぶことを支援しました。ロードソンさんからの寄稿文を掲載いたします。

「私は世界で一番幸運な人間」

ロードソン・タグボジャ
(Lordson Setsoafia Tagbodza, ガーナ共和国出身)

わたしたちは、祈りの度に、あなたがたのことを思い起こして、あなたがた一同のことをいつも神に感謝しています。あなたがたが信仰によって働き、愛のために労苦し、また、わたしたちの主イエス・キリストに対する、希望を持って忍耐していることを、わたしたちは絶えず父である神の御前で心に留めているのです。(テサロニケの信徒への手紙一 1章2、3節)

アジア学院(ARI)への長年の多大なる支援、とりわけ今年の私(Lordson Setsoafia Tagbodza)への奨学金支給について、JELAの皆さんに心から感謝申し上げます。JELAの奨学生である私についてより深く知っていただきたく、自分の境遇について簡単に紹介いたします。

私は1979年に、ガーナ共和国ヴォルタ州の農村で生まれました。父は小学校教諭で、母は小作農民でした。私は9か月の時にポリオに罹患し、その後遺症により歩行が不自由になりました。8歳の時、脚の状態の悪化によって、完全に歩けなくなりました。9歳の時、イタリア人のカトリック宣教師が手を差し伸べてくださり、脚の手術代や、リハビリ費用を支援してくださいました。現在では、普通の人のように生活ができています。私は大卒の教師であり、ガーナ福音長老教会(世界教会協議会の一員)の牧師としてテクニカルスクールのチャプレンを務めるとともに、当校で農学を教えています。教師としての仕事のほかに、持続可能コミュニティセンターを通じて、農家の方々に新しい農業技術のトレーニングも行っています。

こういった境遇ですから、私は自分を世界で一番幸運な人間だと思っています。障がいを持っている人で、私のように生活できる人はほとんどいません。ですから私は、高校教師として働く傍ら、自分の農業に関する知識を、地元の農家の人々と共有することで、父なる神から受けた愛を、我がコミュニティに還元することを決意しました。コミュニティの人々の多くが主として農業に従事しているからです。

大学生になったとき、私はコミュニティへの奉仕活動をさらに広げました。貧困率のより高い、遠くの地域へ、友人と共に出かけ、その場にある技術を使って生産性を高める方法を、現地の農家の人々に教えました。そこで、私と同様のプロジェクトを実施していた現在の派遣団体と出会い、彼らのリソース・パーソンとして、農家の方々への教育やトレーニングに携わるボランティアを行うようになりました。このボランティア活動を始めたのが2008年です。

人道的な働きに携わるにつれ、私は自分の知識やコミュニティのニーズに応える能力の不十分さを自覚するに至りました。コミュニティの要請に応えるために、私はリーダーシップや食糧生産の持続可能性、環境再生に関する知識を追求することを決意しました。私がARIに来たのは、有機農業に関する実践的なスキルを習得し、私たちが食べる食べ物とそれを産み出す土壌との関係や、有機農業がいかに私たちの健康に寄与し、また貧困と戦う術をもたらしてくれるかについて学ぶためです。

私は、作物の生産向上や食糧安保の改善を、自分の地元の資源を使って実現する方法について学びたいと思っています。太陽光技術を使って、灌漑システムを改善したり、収穫物を乾燥させたりすることで、収穫後のロス(私の国で作物の不必要な損失に繋がっている)を防ぐ方法についても、学べたらと思っています。ARIでの研修を終えるまでに、有機農業および有機肥料・有機殺虫剤の製造をマスターしたいです。また、指導者としてのスキルを向上させ、謙虚に仕えることができるようになりたいです。

ARIでの生活は楽しいものです。多様なバックグラウンドを持つ人々と共に生活するのは、私に新たな喜びを与えてくれます。キャンパス内での移動は、少々困難です。地形があまり障がい者に優しくない

からです。特に坂を上るのが大変で、実地研修の際にファシリテーターの方についていくのは容易ではありませんでした。今は電動自転車によって、キャンパス内の移動は楽になりました。電池があまり持たないのですが、食べ物は最高です。また学内の環境もより開放的になってきています。授業での解説はとても参考になり、私は毎日自分のコミュニティや指導者としての仕事に役に立つことを学んでいます。

私は、自分のコミュニティと派遣団体のために叶えたい大きな夢があります。ARIでの研修の後、私は派遣団体での今までボランティアを継続し、環境に優しい建築素材と有機農業によって、団体の長期的目標である森林再生を通じた持続可能なコミュニティの構築のためのトレーニング・センターの設立に貢献しようと考えています。団体の目標である気候変動に関する教育や、森林の再生に挑戦したいです。

これを達成するために、私は「Plant a Tree, Own a Tree」(木を植え、所有しよう)キャンペーンを立ち上げ、学校や教会のある地域で実施し、(二酸化炭素を吸収する)植物被覆を復活させます。また、人材や専門性の面で、団体に対する協力を続けます。また、質の悪い農道による収穫後のロスを低減させるために、土地の耕作や農作物の市場への運搬を行うトラクターを購入するための資金確保に努力します。

さらに、個人的な関心事として、障がいを持つ農業従事者の支援にも力を入れ、トラクターの導入や、生産性向上のための技術サービスの提供によって、彼らが自ら土地を耕し、自立した生活を送れるようにしたいと考えています。また、これまでヴォルタ州内の二つの地区(南 Afadzato と Biakoye)で行ってきた車いすの修理サービスを五つの地区にまで拡大させ、障がい者の移動やコミュニティ内での統合を改善していくつもりです。



元気もりもり森 一樹のブラジル派遣記 その2

JELA の国際青年交流奨学金を受けて、今年3月からブラジル・サンパウロ教会でボランティア研修生として奉仕活動をおこなっている森一樹さん(日本福音ルーテル市ヶ谷教会)から活動報告が届きましたので、ご紹介いたします。

「聖書の愛が試される一週間」

Oi! Tudo bem?

2019年3月にブラジルで10年間活動された徳弘隆浩牧師と由美子夫人が日本にご帰国されました。私がブラジルに行く約8ヶ月前から徳弘先生とはメールで連絡を取り合っていましたので、2月に初めてお会いしてもすぐに打ち解けることができました。

先生ご夫妻がご帰国されるまでの1ヶ月の間、ほぼ毎日行動を共にし、ブラジル社会のこと、日系社会のこと、サンパウロ日系教会のこと、そこに集う教会員お一人お一人のこと、ジアダマでの働きや子ども達のことや音楽教室の運営など、多くのことを学ぶことができました。

私がブラジルでどんな生活をしているのか、一週間の流れについてご紹介したいと思います。

日曜日10時からのポルトガル語礼拝では、ギターやカホン(ペルー発祥の箱型の打楽器)を用いて奏楽奉仕をします。その後の日本語礼拝では、聖歌隊として賛美歌を歌ったり、メロ牧師がお作りになった日本語説教の添削の手伝いをしたり、時には日本語説教を代読する奉仕もしています。

礼拝後、役員会や各会の活動がない時には、日本語での聖書勉強会や日本映画の上映会などを催したりもしています。夜にはジアダマという地域にある姉妹教会の礼拝に出かけます。そちらはポルトガル語礼拝のみですが、そこでも奏楽奉仕をしています。またジアダマでの礼拝後には大学進学や英語習得に意欲のあるブラジル人中高生を対象とした英語教室を開講しています。ポルト

ガル語での授業なので、毎回四苦八苦しながら続けています。

毎週月曜日の午前中は、近所のポルトガル語学校に通い授業を受けます。午後は特に予定は入っていませんが、信徒さんから頼まれた電化製品の修理や信徒さんのお宅に出張してパソコンやプリンターなどの修理や諸設定をしに行くこともあります。

火曜日は週に1度の定休日です。この日は羽を伸ばして外出に出かけたり、午後からは教会員の方がポルトガル語の個人レッスンをしてくださるので、ポルトガル語の勉強をしたり、受け持っている諸教室の準備をしたりしています。

水曜日は朝からポルトガル語学校に行き、午後には教会聖歌隊の練習に参加します。夕方からは、日本語を学びたいブラジル人を対象に、楽しく日本語を学ぶことを目的とした「にほんご教室」を開講し、信徒さんだけでなく一般の方々もお招きして教室を開いています。

木曜日はジアダマという地域にあるスラム街を訪問し、放課後の子供達を対象とした音楽教室やパソコン教室、英語教室を開いています。小学生から高校生までの約20名の子ども達が朝から夕方まで来てくれるこの教室は、毎回大変ながらも、とてもやりがいのある働きです。

金曜日は2つの教室を開講しています。1つ目はパソコン・スマホ教室です。日系人のご年配の方々を対象に、日本語でパソコン・スマホの使い方を教え

ています。最近はそれぞれが抱えているパソコンやスマホの問題を解決する、お悩み相談室のようになってきていますが、難しいことは日本語でないとわからないという方々に好評いただいています。

その後、日系3世の子供たちに日本語を教える家庭教師として、子ども日本語教室を開講しています。ただ机に向かって勉強するだけではすぐに飽きられてしまうので、日本語の歌や踊り、ゲームを交えながら授業を組み立てています。

土曜日にも金曜日同様2つの教室を開講しています。午前中は子ども向けの英語教室を教会で開いています。こちらもただ教えるだけではなく、実践的な会話練習やゲームを通して英語を身につけてもらえるよう努めています。

午後には、日本の大学への進学や日本での就職を見据えたブラジル人を迎える上級日本語教室を開講しています。こちらは、日本語の細かい文法や発音だけでなく、時事や日本語検定試験の問題演習を交えて、多角的に日本語が学べるよう、工夫して教室を運営しています。

礼拝の奉仕やポルトガル語の勉強に加えて、週に7つの教室で講師として働きを持っています。どの働きも聖書の愛が試されると同時に、とても喜びのある働きです。日々の感謝を忘れずに今後も活動していきたいと思っています。(JELA NEWS 51号につづく)



第16回世界の子ども支援チャリティコンサート 実施結果のご報告

JELAは5月11日から7月7日にかけて全国11の日本福音ルーテル教会で「第16回 世界の子ども支援チャリティコンサート」を実施しました。演奏者はヴァイオリンの真野謡子さん(4回目)とチェロの

松本恒瑛さん(初登場)で、各会場で大変ご好評をいただきました。来場者総数は694名、頂いた献金の総額は1,018,958円でした。今回頂いた献金は、JELAの世界の子ども支援事業(インド、カンボジア

の子ども達)のために用います。ご来場の皆様、また教会の皆様、暖かいご支援に心より感謝申し上げます。

ご協賛いただいた団体:

三井不動産リアルティ株式会社、株式会社ハリファックス・アソシエイツ、シュローダー・インベストメント・マネジメント株式会社、西村建築設計事務所、株式会社トムス、株式会社マイスターエンジニアリング、(以上、順不同)。

熊本地区でご協賛いただいた団体:

馬場書店、株式会社ヨネザワ、メルパルク株式会社 ホテルメルパルク熊本、熊本第一信用金庫、株式会社肥後銀行、医療法人社団愛育会 福田病院、株式会社寺原自動車学校、税理士法人近代経営、米白餅本舗、学校法人九州ルーテル学院、フェリシア、株式会社徳一、和煌、東光石油株式会社、株式会社アールエスエス、熊本石橋葬儀社、学校法人九州学院、葬祭ディレクター杉野、株式会社三牧建設工業、ネットヨタ中九州株式会社、株式会社お風呂のシンドー、有限会社野口美容室 n-style、株式会社カムライフ、合資会社千歳農園、ヴィラーージュビル、メガネの大宝堂、山村酒造合名会社(阿蘇の酒れいざん)、(以上、順不同)。熊本地区の後援: 株式会社熊本日日新聞社、株式会社熊本放送、水道町親和会、(以上、順不同)

ご協賛、ご後援を心より御礼申し上げます。



5/11 松本教会(長野県松本市)



5/12 都南教会(東京都世田谷区)



5/25 帯広教会(北海道帯広市)



5/26 大森教会(東京都大田区)



6/15 富士教会(静岡県富士市)



6/16 三原教会(広島県三原市)



6/23 保谷教会(東京都西東京市)



6/29 刈谷教会(愛知県刈谷市)



6/30 名古屋めぐみ教会(愛知県名古屋市)



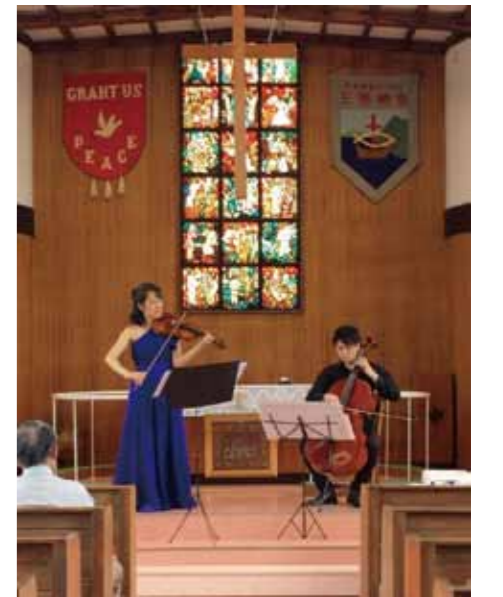
7/6 唐津教会(佐賀県唐津市)



7/7 熊本教会(熊本県熊本市)



徳弘先生退任式



ブラジル福音ルーテル教会ジアデマ集会所改修工事の完了のご報告

JELA はブラジルからの徳弘隆浩先生ご帰国に際して、日系パロキア・ジアデマ集会所の改修工事の支援を実施しました。

ジアデマ集会所は大きな一部屋（ホール）のみの建物で、礼拝や集会、特に地域の子ども支援の教室（主に音楽やパソコン教室）など多目的な用途を行ってきました。近年、生徒の急増に施設の受け入れ体制が追いつかず、安全で効果的な運用に支障がでていました。

今回の改修工事により、駐車場（前庭）に屋根を設置し、雨天でも体操が可能になりました。また、安全策として塀を高くし、故障していた門を交換し、走行動作を調整し、整備したことで、同集会所の機能が向上しました。

現地からは、「雨の日は何もできない場所が、屋根で覆われたことで活動がしやすくなりました。サッカーや音楽教室も前庭でできるようになり感謝しています」との声が届いています。

これまで JELA のブラジル支援をお支えくださった皆様に、この場を借りて心より御礼申し上げます。



支援者一覧

(2019年6月1日～2019年9月30日)
 青木孝士 / 明比輝代彦 / 阿部光成 / 安藤淑子 / 池田哲也 / 泉真琴 / 市原周子 / 市吉伸行 / 井藤育子 / 井上秀樹 / 大金修・よし子 / 大谷忠雄 / 大塚真佐子 / 大嶺愛持・裸覇武・十六夜 / 小城ルナこども園 / 奥山信子 / 唐津ルナ子ども園 / 京谷信代 / 後田富久子 / 小暮修也 / 古庄理世 / 酒井恵美子 / 佐藤たか子 / 白井幸子 / 杉山美紀子 / 杉浦りえ / 高津和子 / 高橋竜太 / 武井順太郎 / デバットパーティ / 辻裕子 / 鳥飼勝隆・豊子 / 中島千麻子 / 中山純郎 / 中山正子 / 鳴海亮 / 芳賀美江 / 原怜子 / 原口恵子 / 原田裕子 / 平林洋子 / 廣幸朝子 / 深川ひろみ / 保坂和子 / 南節子 / 南谷なほみ / 八坂由貴子 / 矢崎皓一・由美 / 安田やまと / 山本了 / 山口敏子 / 若原奇美子 / JELC 玉名教会

以上、順不同・敬称略。ご支援ありがとうございます。
 匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下さい。

編集後記

気になる CM があります。若者が 30 年あまり先の自分と対話する設定です。「うそは必要ですか」という唐突なような若者の問いに、老練した風情の男性が「今の時代、必要なんでしょうね。」と答える。そして続けるのです。「自分も、本当のことを知りたいとあまり思わなくなったね」。この言葉は、まさに今の時代の多くの人々の思いを代弁しているのかもしれませんが。個人的には、ここで言う「うそ」は、他者への配慮から生まれる行為を含んでいるのだろうと推測します。周囲との摩擦を減らすため、多種多様な価値基準に寛容な姿勢を示すため、そう考えると、旗幟を鮮明にすることは、確かに現代的には賢い生き方ではないのかもしれませんが。

話は変わりますが、今年、JELA は創立 110 周年を迎えました。しかし、大きなイベ

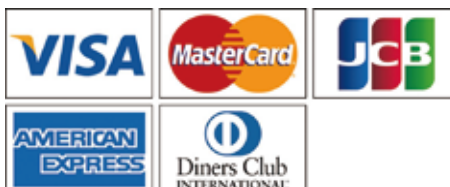
ントはあえて控え、JELA の原点とこれまでの働きを再吟味する年にしたいと考えてきました。JELA は、アメリカ南部福音ルーテル・ユナイテッド・シノドの宣教師団が、明治期の日本に聖書を、イエス・キリストの福音を伝えたいと文字通り命を賭して来日したことによって始まった団体です。当時、彼らが伝えたであろう聖書に記された「本当のこと」は、摩擦なくして語られることはなかったでしょう。「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」という毅然とした姿で御言葉を宣べ伝え、かつ溢れんばかりの愛の実践として、救済ホームの設立など日本における社会福祉の先駆者となって下さったのだろうと想像します。JELA の原点がそこにあるのであれば、現代的賢さ以上に求めるべきものもそこにあるように思うのです。

(渡辺 薫)



国連で合意された17のグローバル世界共通の目標を「SDGs(Sustainable Development Goals: エスディー・ジーズ)」といます。JELAはSDGsに賛同し、よりよい国際社会の実現に貢献しています。

JELAの活動にご支援を！
 各種献金のご送金は下記をご利用ください。



ホームページからクレジットカードでご寄付いただけます！

JELA
 Japan Evangelical Lutheran Association

一般社団法人日本福音ルーテル社団
 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26
 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523
 Email: jela@jela.or.jp
 HP: http://www.jela.or.jp
 郵便振替口座番号: 00140-0-669206
 加入者名: 一般社団法人日本福音ルーテル社団